

せたかむい

年表で読む 古平の歴史

[132]

古平町役場総務課
842-2181(代表)
平成20年9月1日

商工業 (18)

無限責任大典記念

古平信用組合

◇「金融緊急措置令」

古平信金については、二二〇号

(一月号)の「株式会社小樽銀行古平支店」に引き続いで載せてています

が、これは古平町史第三巻(平成十一年三月発行)の内容を多少書き直したものでです。

町史第二巻の執筆に当つては平易な文章で、難解な語句は努めて避けられました。その結果、生活費として預金などはどんどん引き出され、戦時中の債券(国債)の払い戻しなどもあり、日銀券(お札)はそれに合わせて発行されるので、物価の上昇と通貨の発行という悪循環があり、インフレがどんどん進行してしまいました。

それで転載に当つては、内容をより親しみやすいようにと表現を工夫し、要点については簡単な説明も付け加えてみました。蛇足かも知れませんがお役に立てば幸いです。

「金融緊急措置令」

—昭和二年一月一七日施行—

急速なインフレーションに見舞われた、戦後の生活を体験された方には苦い思い出かも知れませんが、戦争中は軍需品が優先して生産され、一般の生活用品などの生産は極度に制限されていました。

しかし、軍事費もほとんど無制限に支出されていましたから、物価

うな語句や表現が目にできます。

それで転載に当つては、内容をより親しみやすいようにと表現を工夫し、要点については簡単な説明も付け加えてみました。蛇足かも知れませんがお役に立てば幸いです。

「金融緊急措置令」

—昭和二年一月一七日施行—

という額面のお札が発行されていて、買い物にお札を抱えて行つても、買える食料は手にのるほどしか無いのだそうです。

「こうなつてはどうしようもないでしようが、昭和二〇年ころから、戦後の日本経済は誰もが経験したこともないようなインフレの時代に入りました。」

はどんどん値上がりしました。

政府が定めた公定価格というものはありました、それ以上の価格、いわゆる闇価格(やみかかく)でなければ物は買えないような時代でした。その結果、生活費として預金などはどんどん引き出され、

戦時中の債券(国債)の払い戻しなどもあり、日銀券(お札)はそれに合わせて発行されるので、物価の上昇と通貨の発行という悪循環があり、インフレがどんどん進行してしまいました。

その中身は次の9項目からなるものでした。

1、金融緊急措置のこと

2、日本銀行券預入れのこと

3、臨時財産調査のこと

4、食糧緊急措置のこと

5、隠匿物資緊急措置のこと

6、物価対策の基本的なこと

7、緊急就業対策上の重要なこと

8、鉱工業生産増強対策について

9、国民生活用品の統制について

以上ですが、そのねらいは急激に広がるインフレ対策に最重点が置かれていて、国内にあふれているお金を回収して、ヤミ価格での購買力を徹底して抑え込もうといふものでした。

1・2については先号の本文にあるとおりですが、2、日本銀行券預入れのことによって、ほぼ一ヶ月後の三月一二日には、お札の発行高が約七五パーセントも少なくなり、通貨の流通は一応落ち着いたように見えました。しかし、その後のインフレの進行を防ぐため、「第一次金融緊急措置令」として、四月一日からは封鎖預金から払い出すことの出来る現金限

度額を、世帯主月額二〇〇円を、

世帯員と同額の一〇〇に引き下げ制度を強化したのです。これらの措置によって、沈静化すると思われたインフレですがそう簡単には收まらず、その後もこのようない金融措置令が実施されました。

政府は深刻な経済危機を打開するため、昭和二二年に新物価対策を発表して、公務員の賃金ベースと配給の統制、ヤミ価格の撲滅などによってインフレを食い止めようとしていました。

しかし、その新物価対策も食糧供出、懐かしい言葉ですぐの不振から、一向に改善策は見え出されませんでした。二月に四三円だった酒が、一〇月には一三三円に値上がりし、密造酒が横行して、それを飲んで死者が出るという騒ぎまで起きました。

そして昭和二五年六月、思いもかけず朝鮮戦争が起き、皮肉にもこの戦争による「特需」ブームで、日本経済は息を吹き返すきっかけにならなかったのです。

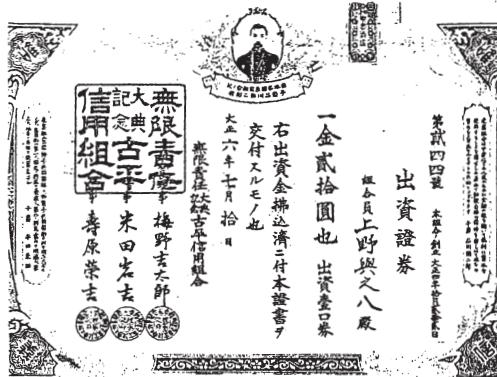
(朝鮮戦争は三年余りも続き、同二八年七月、休戦協定に署名して戦闘は終了しました)

X X X

◇北海信金との合併

北海信用金庫と古平信用金庫との合併は、関係者の間では、以前から何らかの交渉が行われていたとの観測があつたが、北海道新聞(夕刊)が平成一六年三月二三日、「北海・古平信金が合併・来年二月・預金量道内3位に」という記事をのせ、日本経済新聞も同日付で同様の記事を報道した。

報道の主な内容は、古平信金は平成一六年の決算で全国二二六信金の中で最下位であること、来年から実施される新しい金融措置を



前に、経営の安定化が急がれたこと、不調に終つたが、古平町をふくむ北後志五か町村合併の検討が始まると、古平町・積丹町が存続しなくなれば、経営環境が更に厳しくなるため、経営規模を拡大する必要に迫られていた、ことなどが挙げられている。

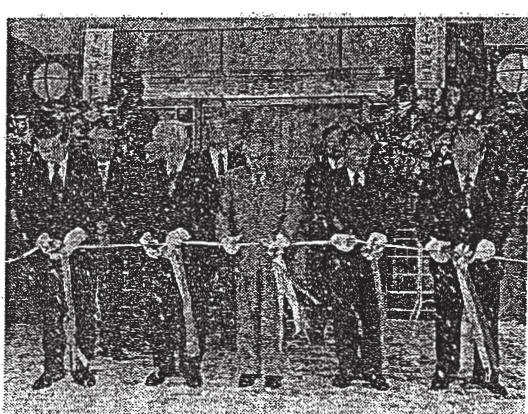
平成一七年二月三日、北海信金・古平信金の合併に当つて、北海道財務局から認可書が交付され、二月一四日、合併により正式に「北海信用金庫」が発足した。

午前九時の営業開始に先立ち、古平支店(旧古平信金入船支店)でセレモニーが行われ、伊戸理事長が「後志全地区に店舗を持つ唯一の金融機関として発展を目指す」と挨拶、本間古平町長らとティープカットを行つた。

◇北海信用金庫の概要

北海信金は大正二三年(一九二六)、余市信用組合として設立され、一九五四年に後志信用金庫に改組し、一九六四年から現在の名称となつた。一〇〇三年二月末時点では、後志管内のほか、渡島管内長万部町、小樽市、札幌市、夕張市など

旧古平信金本店前でテープカット



に四四店舗(出張所を含む)がある。役職員数は三八三人、預金高は三五五三億二五〇〇万円で、道内の二六信金中で四位となつている。貸出残高は二〇八九億四一〇〇万円である。

この合併により、北海信金は預金高で札幌信金を抜き道内三位となり、旭川信金・帯広信金に次ぐ規模となる。

(この項は、元古平信金越中理事長から寄贈を受けました北海道新聞・日本経済新聞などによるものです。ありがとうございます。)

で手習いする。

▼一月一四日

起床七時、晴天になった。雪の消えた後の道路は悪い。ダリヤの根一箱を倉に囲う。外に畠のイモ穴にも囲う。どちらのほうがいいのか、試験に二箇所に囲つた。今日は大嘗祭（おおなめさい）当日で学校も休みだ。午後一時から、祝聖会で禪源寺の門前から役場の前通りまで、サクラを記念樹として植えることになったので、家からクワを持参して行く。穴掘り、支えの棒切り、植樹など七人で一生懸命だ。四時終る。四、五年したらよい記念樹になるだろう。終つて和尚の部屋で茶菓をよばれ、ラジオを聞いて五時過ぎ帰る。夕食後、私と原田さんはドロノキの金沢さんへ、祝聖会を代表して見舞いに行くことになつたので、見舞品を持参して行く。小野寺さんの別家の家に居るとのこと。晴れた夜だが道路は悪い。病状は余り良くないうで、今日もずつと眠つてているとのこと。七時半帰る。それから八時半頃から一〇時半ま

▼一月一五日

起床七時、曇天だが割合暖かい。熊さんは天野さんと農園行き、ユリを掘り上げたり、リンゴや庭木などの囲いをする。イカ漁は昨日は四〇〇から五〇〇とったと言うが、今朝は二〇から三〇ぐらいとのこと。スケン漁は相当にあるよ

▼一月一六日

路の悪いこと甚だしい。九時に終り、何たる因果ならん。夜に入り雨が降る。手習いをする。

▼一月一七日

起床七時半、一昨夜の暴風もようやく今日はないだ。熊さんは、屋根へサキリで雪止めをする。寒

くなつたが菊の花は元気よい。先日、展覧会で買い入れた八本の菊

の内、四本はまだきれいに咲いてある。私の作つたのは鉢に入れてあるので、まだまだ花は見事だ。

明年はいつそうよい花を咲かせよう。困主人から、先日の饅饅に召された記念絵はがきをいただく。

実に名譽なことだ。正午、ドロノ

キ金沢さんの葬式送りに禪源寺へ行く。午後二時頃農園行き、草木

が枯れてすっかり初冬の景色となつた。菊に名前を書いた札を立て

私は店番をしながら障子張りをする。ドロノキの金沢さん、今朝亡くなられたとのこと。昨夜、私も見舞いに行つた時は左程とも思つて行くことでの自動車を交渉する。三時半、原田さん前から乗る。金沢さんの通夜に、祝聖会員が揃つて行くことでの自動車を交渉すが見舞いに行つた時は左程とも思つて行くことでの自動車を交渉する。大典祝賀会帰りに災難に遭うとは、何たる因果ならん。夜に入り雨が降る。手習いをする。

路の悪いこと甚だしい。九時に終り、帰りの自動車が来る。暗夜に雪が降る。私は車の脇に立つて来た。帰つたのは九時半、ドロノキではまだランプだが暗いものだ。金沢さんの通夜に、祝聖会員が揃つて行くことでの自動車を交渉すが見舞いに行つた時は左程とも思つて行くことでの自動車を交渉する。大典祝賀会帰りに災難に遭うとは、何たる因果ならん。夜に入り雨が降る。手習いをする。

高野名手作さんの日記から 当時の世相を見る

(139)

うだ。父はこの頃気分よろしいとて、今日もエビス倉で仕事をしたり、支店まで行つたりしている。七二歳だが丈夫なほうだ。御大典中なので、町中で国旗を立てている。困主人は、明日札幌で行われる饅饅（きょううさん）に召されたので、今日小樽まで行かれた。明日は千載一遇の晴れの場所へ出られるので実に名譽なことである。

三時帰る。小樽では、本日昼から
旗行列、夜は提灯行列とのこと。
幸治から手紙が来た。

習いにはよい時だ。

起床七時、この頃の日の短いこ
と、六時半頃まで電気がついてい
て、三時半には早点灯する。今日
はよい天気で暖かいが、御大典も
八分通り済んだ。スケソ漁は昨年
のような漁の期待はできないよう
だ。熊さんは午後から農園行き。
14号の畑は明年から松岡さんへ
貸すので、リンゴの木を切る。暖
かく凌ぎやすい日だ。父もこの頃
は気分も良く、ご飯もおいしいと
言う。

▼一月一八日

起床七時半、曇天だが暖かい、
てお参りの日だ。御大典も滞りな
く大方済んでめでたいことだ。大
阪のおじさんから新聞が送られて
来る。記事や写真を見ると、京都
や大阪ではずい分と賑やかであつ
たようだ。夜、困ヘラジオを聞き
に行く。九時半より手習いする。

▼一月二十一日

起床七時半、よい天気だ。熊さ
んは農園へ行き柴を板倉へ入れる。
私は父に言われて、倉の瓦の傷ん
だのを取替える。小春日和だ。私
も二時頃農園へ行き、やぶからヨ
モギなど取り明年に菊花用に積み、
四時頃帰る。困主人から札幌での
饗饌の話など聞き、九時帰る。後、
二時間ほど手習いする。この頃は
夜が長く、左程寒くはないので手

苗三六株（六種類）の植え付けを
する。三年後にはなるだろう。帰
ったのは二時、夜、七時から手習
いする。この頃より雨が激しく降
り、雷鳴、電光もものすごい。

▼一月二三日

起床七時、去る一〇日頃は雪が

降り冬らしくなつたが、この頃は
晴天なので子供らは外遊び、正治
は絵本が大好きで、読んでくれと
きかぬ。久はこの頃カラスなどを
ごかつた。今朝聞けば、カモノイギ
の榎本さんへ落雷があつたとのこ
と。雨が降つて外の仕事が出来な
いので、熊さんと二人で倉庫内の
リンゴ選びをやる。午後から雨風
が激しく海は大時化になつた。八
からイワシを一モツコ貰う。煮干
し、焼き干し、塩蔵などする。私
が農園で二百十日頃から手入れし
ていた菊、根がついたようなので
裏の箱に入れてあるがなかなか元
氣よい。鉢植えにして茶の間や玄
関へ置く。一二月中頃までは大丈
夫ならん。菊は霜や雪に強く、ま
すますよい香を放つよい花だ。明
年はよい花を作ろう。夜に入つて
暴風はいつそう激しい。例の通り
板倉で食べたがおいしい。後、熊

熱心にやつた。面二人と、上畠の木切りに行く。
雪もすっかり消え、今日は朝から
好天氣、小春日和だ。熊さんは出

▼一月二二日

起床七時、割合暖かい天気だ。

昨晚からの雨、今日も一日中降つ
ている。昨晚の雷鳴はずい分とす
ごかつた。今朝聞けば、カモノイギ

の榎本さんへ落雷があつたとのこ
と。雨が降つて外の仕事が出来な
いので、熊さんと二人で倉庫内の
リンゴ選びをやる。午後から雨風
が激しく海は大時化になつた。八

からイワシを一モツコ貰う。煮干
し、焼き干し、塩蔵などする。私
が農園で二百十日頃から手入れし
ていた菊、根がついたようなので
裏の箱に入れてあるがなかなか元
氣よい。鉢植えにして茶の間や玄
関へ置く。一二月中頃までは大丈
夫ならん。菊は霜や雪に強く、ま
すますよい香を放つよい花だ。明
年はよい花を作ろう。夜に入つて
暴風はいつそう激しい。例の通り
板倉で食べたがおいしい。後、熊

幸治から手紙が来た。

▼一月一九日

起床七時半、よい天気だ。熊さ
んは農園へ行き柴を板倉へ入れる。
私は父に言われて、倉の瓦の傷ん
だのを取替える。小春日和だ。私
も二時頃農園へ行き、やぶからヨ
モギなど取り明年に菊花用に積み、
四時頃帰る。困主人から札幌での
饗饌の話など聞き、九時帰る。後、
二時間ほど手習いする。この頃は
夜が長く、左程寒くはないので手

幸治から手紙が来た。

▼一月二四日

起床七時半、雪も降らず天気が
よいことだ。大の四十九日で、妻
が九時頃から手伝いに行く。私も
一時によばれていく。読経後、
和尚さん、困おつかさんらとご馳
走をよばれる。いろいろ話しこ
と、六時半頃まで電気がついてい
て、三時半には早点灯する。今日
はよい天気で暖かいが、御大典も
八分通り済んだ。スケソ漁は昨年
のような漁の期待はできないよう
だ。熊さんは午後から農園行き。
14号の畑は明年から松岡さんへ
貸すので、リンゴの木を切る。暖
かく凌ぎやすい日だ。父もこの頃
は気分も良く、ご飯もおいしいと
言う。

起床七時、曇天だ、割合暖かい。
朝、久をおんぶして浜へ出て見る。
上ナギ、富丸と末広丸が今出ると
ころだ。岩内からスケソ製造に來
ている上田漁場跡では、人夫が一
生懸命やつている。一〇時頃農園
行き、上畠を松井さんが一人で水
田こしらえをやつている。境界を
教えておいた。一時過ぎ、熊さ
んが弁当を持って来てくれたので
私が弁当を持って来てくれたので
和尚さん、困おつかさんらとご馳
走をよばれる。いろいろ話しこ
と、六時半頃まで電気がついてい
て、三時半には早点灯する。今日
はよい天気で暖かいが、御大典も
八分通り済んだ。スケソ漁は昨年
のような漁の期待はできないよう
だ。熊さんは午後から農園行き。
14号の畑は明年から松岡さんへ
貸すので、リンゴの木を切る。暖
かく凌ぎやすい日だ。父もこの頃
は気分も良く、ご飯もおいしいと
言う。

この頃サバが大漁で、皆賣つて焼干しなどにしている。夜、困ヘラジオを聞きに行く、面白かつた。

▼一月二五日

今朝から寒さが強く、朝二八度F(三、三度C)まで下がつた。天気はいいので、熊さんは農園で14号の木切りをやる。今日は学校が休みなので、子供らは家にいて賑やかだ。大謀ヘサバを頼んでおいたら、正午頃とれたと電話があつたので、熊さんに取りに行つてもう、帰つてからの話では二箱貰い、熊さんも一箱貰つたといふ。気の毒なことだ。夜はまた焼干しや塩蔵など一生懸命やる。九時頃から雨が降り出したら、少し暖かくなつたようだ。夜は泰ちゃんから菊花栽培秘訣という本を借りて読み、大いに得るところがあつた。今日は手習いを休む。

▼一月二六日

起床七時、今日も朝から寒さがきびしい、チラチラと雪が降る。海は時化だ、汽船が三隻避難している。六時発の一番の自動車は、まだ暗いうちに出発だ午後一時頃

熊さんと二人で農園行き。一日一

日本木の葉は枯れていく。昨夜読んだ菊花栽培の本にあつた堆肥を、

熊さんと二人でこしらえた。一坪

四方に五寸ほど土を掘り、下に枯葉などを入れ、その上に馬ふんを入れ、土を少し掛けたから下肥を入れる。これを三度繰り返して、

その上に俵で被いをした。こうし

て来春まで置けば、実に理想的な

菊花用の培養土が出来るのだ。後

イチゴを試験的に二、三〇株本植

えし、肥料をやつて四時頃帰る。

この日、天皇陛下は京都をご出発

名古屋に向わせられる。夜、困で

ラジオを聞く。

▼一月二七日

昨夜から急に寒さが強くなつた。今晩は床の中でも寒さを感じる。

七時起床、戸外は白くなつていて

チラチラ雪も降り出す。熊さんは農園行きを休む。サバもとれない

ようだ。月末なので目録を書く。

△分店の主人が昨夜五時頃に、風

呂に行くと言つて出たきり行方不

明になつたとて、青年団、警察、

それに知人などで行方を探してい

安定だつたとか、心配なことだ。

部落会の人まで出て大騒ぎで探し

ている。帰つて菊花栽培の本を読

んだが、大いに得るところがある。

▼一月二九日

起床七時、天気快晴、今日△分

店主人を探すのに部落民が行くこ

とにあつた。聞けば昨夜、青年団

が廻り淵奥の大橋付近で、泥の中

に足跡があつたのを見つけて持参

したこと。何よりよい手掛か

りだつたので、今朝から大勢で行

四時に終る。午後八時頃、タ寺田

の兄貴で子供の頃よく遊んだ庄太郎が、今夜、たまたま古平の沖に停泊した汽船に乗つていて、母親

に会いたいと上陸して来たとのこ

と、私のところにも知らせがあり、

行つていろいろ話しお九時帰る。

▼一月二八日

七時半起床、今日は亡き母の命日、和尚さんが来られる。聞けば△分店の主人が昨夜五時頃に、風呂に行くと言つて出たきり行方不明になつたとて、青年団、警察、それに知人などで行方を探してい

安定だつたとか、心配なことだ。

部落会の人まで出て大騒ぎで探し

ている。帰つて菊花栽培の本を読

んだが、大いに得るところがある。

▼一月二九日

起床七時、天気快晴、今日△分店主人を探すのに部落民が行くことにあつた。聞けば昨夜、青年団

が廻り淵奥の大橋付近で、泥の中

に足跡があつたのを見つけて持参

したこと。何よりよい手掛か

りだつたので、今朝から大勢で行

くことになり、私も八時頃出かけた。幸い上天気だね冬枯れの空は広々として心地よい。泥の木の方も水田が出来てからは、だんだん開けてきたようだ。大淵の小屋から畠中の中屋まで行く。水車のところに手拭いが落ちていたとのことで、大いに力を得た。一〇時頃、

大名の沢で発見したとの知らせが

あつたが、すでに死亡していたとのこと。私もそこへ行つたが、ヤブの近くで石ころもありひどい所だ。よくもまあこんな奥まで来たものだと思う。タンカに載せ大勢で担ぐ。炊き出しのにぎりめしを食べる。家に帰つたのは一時半過ぎで、ずい分疲れた。湯に入り後分店へお悔やみに行き九時帰る。

△分店へお悔やみに行き九時帰る。

夜、分店の仮通夜に行き九時帰る。

今日は祝聖会の例会日、午前六時起床、出かけたが町はまだ暗い。

昨夜來の雪は三寸余りも積もり寒

▼一月三〇日

起床七時、曇天寒空だ。月末で

熊さんは集金に出かけた。大謀の

サバ今日は少し揚がつたという。

夜、分店の仮通夜に行き九時帰る。

今日は祝聖会の例会日、午前六時起床、出かけたが町はまだ暗い。

昨夜來の雪は三寸余りも積もり寒

い。寺に着いたら七人目であった。七時に読経が終り、いろいろ話しあ時帰る。朝食を済ませた九時頃、俄かに火事だと叫ぶ声があるので、飛ぶようにして戸外に出てみれば、土場の方から煙がモウモウと立ち昇っている。ビックリして駆けつけた。土場の林の裏、菊池セン子の家だ。大騒ぎの中、バケツに水を汲んで手渡しで水をかける。そのうち消防組来てようやく消し止めた。一棟だけではほかに延焼せぬは先ずよかつた。菊池さんは気の毒なことだ。夜、△分店の通夜に行つたが吹雪となる。これが根雪ならん。子供たちは婦人会の演芸会が学校であるとて見物に行く。

▼一一月二日

起床七時、カレ網が新地方面で売れ切れなので、昨日と今日で一万間も出た。雪が降り積もり五寸ぐらい、余市通いの自動車は沖山中から戻つたとのこと。これからは船だけになる。一時、分店の葬式送りに行く。帰つて手習いする。

▼一一月四日

寝床に入つても寒い寒いと思つていたら、昨夜の雨は今日は吹雪となり、寒さもずい分きびしい。玄関の板の間に置いた菊の鉢も凍る。戸外は大吹雪だ。いよいよ寒中らしくなつた。電話機のところへも雪が吹き込んで白くなつてゐる。それでも四郎らは元気、目出し帽をかぶつて戸外へ出る。

夜になつても吹雪は止まぬ。座敷のコタツにて八時から一〇時まで手習いする、硯の水が凍る。今日田岸からハタハタを貰い初物を食べる。ハタハタを食べると初雪だと父がよく言つていたが、これが根雪かも知れん。

▼一一月六日

手習いして一時休む。

午後一時葬式とのこと。金に不足なくとも病氣で不幸が続くとは、氣の毒なことだ。一〇時から役場で、灌漑溝組合の役員の選挙があるので行く。一時半になつても始まらぬので帰り、七の葬式送りに行く。大吹雪になつた。玄関に置いた菊花が凍つた。夜、ダイマ

ルに話しに行き、九時半帰り、後手習いして一時休む。

午後一時葬式とのこと。金に不足なくとも病氣で不幸が続くとは、氣の毒なことだ。一〇時から役場で、灌漑溝組合の役員の選挙があるので行く。一時半になつても始まらぬので帰り、七の葬式送りに行く。大吹雪になつた。玄関に置いた菊花が凍つた。夜、ダイマ

▼一一月七日

店の帳場で筆を持っていると手が冷たくてピリピリする。店はまだコタツをつけぬ。精々我慢するつもりだ。四へ行つて聞いたら、七の二五歳の娘、かねてから病氣のところ札幌で亡くなつたとのこと。夕方から荒れ模様になる。

起床七時半、本年も残り少なくなる。今日は吹雪も止み、時々青空も見える天氣になった。少しはよくなるだろう。余市通りの自動車は休んだが、町中の自動車はまだ運転している。夜、四より頼まれて、発売の広告ビラを二〇枚ほど書く。手習いの練習にはよいことだ。

起床七時半、本年も残り少なくなる。今日は吹雪も止み、時々青空も見える天氣になった。一年を過ごすのも早いものだ。今日は吹雪も止み、時々青空も見える天氣になった。少しはよくなるだろう。余市通りの自動車は休んだが、町中の自動車はまだ運転している。夜、四より頼まれて、発売の広告ビラを二〇枚ほど書く。手習いの練習にはよいことだ。

▼一一月八日

起床七時半、チラチラ雪が降り寒い日だ。ナギなのでカレ網の船

も今日出初めする。港町 本本間の

この吹雪でも馬そりで河原から運搬している。海の時化でスケソ釣りも出ない。沖には大型汽船が四隻避難している。四郎と悦三は夕方の下水のところで、友達と雪に水をかけて滑るところをこしら

えると、着物も足袋もぬらして来る。この寒さにも子供は元気なものだ。子供たちは賑やかだったが、

八時頃には皆休んだ。コタツにて手習いをし一〇時休む。

▼一一月九日

八時頃には皆休んだ。コタツにて手習いをし一〇時休む。

で運搬している。

でには帰省するというので、買い物などを頼んだ。

に気の毒なことである。

▼一二月九日

起床七時半、今日は雪も降らず割合暖かい。熊さんと倉庫内でリソゴ選びをやる。子供らは日曜なのでスキーをする。衣服をぬらして帰る。

▼一二月一〇日

昨晩より雨模様であったが、今朝も雨雪が降り、沖風が強く海は大時化。今日も熊さんと倉庫内でリソゴ選びをやる。次第に吹雪に変つたので板戸を閉める。今日から店にコタツをかける。子供らも入る。

▼一二月一一日

起床八時、寒い日だ。命日で台所では忙しい。悦三、風邪気味で頭痛するとして学校を休む。大したことはないようだが、四郎から見れば弱い方のようだ。熊さんは屋根の雪下ろしをやる程ではないが、唐紙の開け閉めが少しきついので下す。カレ網着業したのでボツボツ忙しい。夜、七時から一〇時まで手習いする。幸治から二〇日ま

で発動機船遭難が新聞に出ている。白米その他で四千円からの積荷と六名が溺死したこと。年末になつて気の毒なことだ。九時から手習いして一〇時半まで熱心にやっている。この頃、自分ながら少し上達でみてもらう。風邪だが心配する程のことではないとのこと、悦三はほかの兄弟から見れば体質が弱いほうで、病気には負けるほうだ。

▼一二月一二日

起床八時、今日は静かなよい天氣、小樽通いの共栄丸が来た。店はカレ網支度で相当に忙しい。カレ網もいよいよ売れ切れになる。悦三は今日も風邪気味で休んでいる。函では東京方面へ送る丸太七千本を売約、目下盛んに切り出している。

▼一二月一三日

起床八時、なかなか寒さがきびしい。悦三が一一日から風邪気味で休んでいるので、今日近藤さんでみてもらう。風邪だが心配する程のことはないとのこと、悦三は

▼一二月一四日

起床八時、雪が降り寒さもきびしい。悦三、昨夜は頭がイタイイタイと言つていたが、今日は休みでストーブにあたつていたが、午後からは四郎たちと遊んでいる。

この分だと良くなるだろう。アメリカで発動機船遭難が新聞に出ている。

白米その他で四千円からの積荷と六名が溺死したこと。年末になつて気の毒なことだ。九時から手習いして一〇時半まで熱心にやっている。この頃、自分ながら少し上達

▼一二月一六日

起床七時、今日は大吹雪、そして海も大時化だ。学校は休みなので午前はトミ、午後は吉治に久の

機嫌がよく、育て易い子だ。この頃はリソゴでも何でも人が食べていると食べたがる。三月頃にでもなつたら、浜へ遊びに行きたがるだろう。年賀状、例年はゴム印の謹賀新年を押していたが、本年は習字練習のつもりで自分で書いている。二十日頃までに全部整えるつもりだ。夜、雨雪になり吹雪で大時化、時々電灯も消えローソクをつける。八時頃、函から歳末売り出しのビラを頼まれ行く。二十五枚も書いた。ストーブで暑いぐらいいだ。一〇時終りいろいろ話して一時過ぎ帰る。ちょうど手習

いによかつた。

(続)

住民の悲願

「陸の孤島」から開放

7

積丹国道開通

★永久橋として

古平橋の竣工

距離が近かつたが沢江小学校が設立されたいきさつがある。

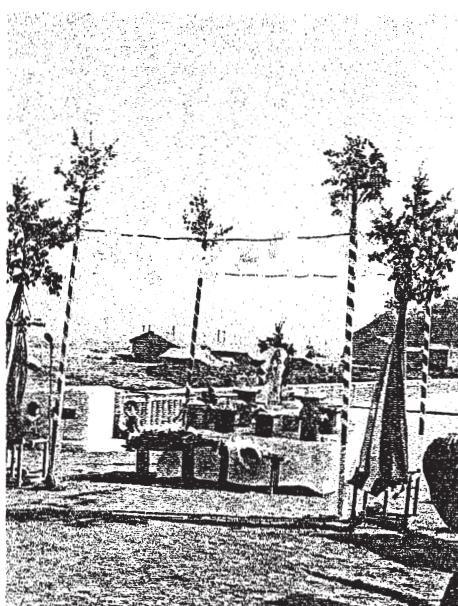
積丹国道改修工事の総仕上げとして、古平側では古平橋の完成が待たれていた。工事中も部分的には通行できた区間もあつたが、古平川では依然として古い木橋のままで、補強はされていたが極めて危険な状態で利用されていた。

浜町と沢江町を隔てている古平川に橋が架けられたのは明治二八年のこと、人がようやく通れる程度の仮橋で、これが初代の古平橋であつた。それ以前は渡し舟で往来していて、児童の通学にも支障のあることから、

その後、洪水で一部破損し修理をしてきたが老朽化し、また自動車の交通が困難なことから、昭和六年、木橋としては最新式のポニートラス式の橋に架け替えられ、渡橋式には再び田附さんと堀玉吉さん一家の二組の夫婦三代が渡り初めをした。

戦中に、このポニートラス式の橋は一部が破壊すると修復が難しいということから、橋脚を増やして補強し、橋の上には丸太を敷いて土砂で覆い、撤去されるまでこのままの状態であった。

昭和三十三年、海岸道路の開通にともなつて四代目となる古平



↑ 祭壇を設け渡橋式を待つ

↓ (下左) 田附・堀さん両家の三夫婦が揃って渡り初め

↓ (下右) 米俵を曳いた馬、参列の人たちが後に続く



← おめでたい七福神に扮装して竣工を祝う町民



橋が完成した。長さ一三〇尺、幅七尺で、P.S.コンクリート造り、六千二百万円の工事費と二カ年を要して完成した永久橋である。

と、交通問題が上位を占めた。
また、古平橋に接続する浜町側では、国道の通る浜町第五町内会の人たちが熱心にアーチなどの飾り付けなどをし、開通式



れたが、実施方法や準備に手間どったことから、主な団体や職場などを通じて二百余名からアンケートをとった。その結果、
1位 積丹国道開通
2位 古平橋竣工
3位 冬季間もバスの完全運行

れに加わり、さらに自動車のパレードがこれに続き、積丹国道の開通と古平橋の竣工を祝つた。

昭和三年は通称『ナベ底景気』とも言われる不景気な年であった。そんな中で町内の話題を探らうと、町民からのアンケートによる初めての町の十大ニュースを募集することが考えられたが、

内村との境に近く六志内がある。
『北海道蝦夷語地名解』による
トルオクシユナイ＝路を流れ
る川、アイヌ語であり、これに
近い発音だったと思われるが、
その後、今のような字が当たら
れるようになつた。文字と地名

とは全く何の関係もない。

古平川の支流に沿つて、神恵内村との境に近く六志内がある。(約一万年前から現在までに、河川によって堆積して出来た平野) 古平川の本流一帯の沖積平野は農耕に適していたので、数は少ないがアイヌの人たちが住み、明治中期には本州から団体で移住した人たちも入植していた。

六志内地区にも少数の入植者がおり、山頂を僅かに隔てて神恵内側にも開拓地があつたことから、山頂を越えて、神恵内方面へ抜けるけもの道程度の山道があり、後に積丹半島を横断する道路建設へのきっかけにもなつた。

戦後、六志内地区への入植が始ままり、一方、神恵内村でも奥地の開発が進んで、学校の分教場が出来るほど戸数も増え、相互の交通が新しい課題として浮上してきていた。

(神恵内道路の建設・続く)

国道開通に続いて

(1)

神恵内道路の建設

町内の学校探訪

[13]

古平小学校

◇教員定数の増加

大正五年一学級増加により、
教員定数一名が増加した。この
年、町会(町議会)により教員
の俸給月額を一八銭増額するこ

とを決議した。

古平町の小学校教員の平均月
額は約二六円で、当時は全額を
市町村が負担していたが、その
市町村の財政によって支給額に
多少の差があった。

町では町長・小学校長共に月額
七〇円(大正一〇年は町長一〇
円、校長一〇五円)であった。
(年度町会事務報店書)による。
当時と物価を比較すると個々に
差はあるが、一万倍を少し超え
たぐらいと考えられる)

◇油絵の寄贈

大正五年、小樽区の洋画家工
藤三郎が来町し、児童の図画教
育奨励のためとして、古平小学
校に二〇〇号の油絵を寄贈した。
絵は厚苦岬から美國町沿岸と
宝島を望んで描かれたもので、
工藤画伯の得意とする題材であ
った。

この絵は新校舎が落成した後

に、正面玄関上の二階応接室に
掲げられていた。

(工藤画伯については、道新・
《人物散歩》に紹介されていて、

郡部では、通学路も充分に整
備されていないこともあって学
校数も多く、その町村の市街地
にある、学級数の多い小学校を
一般に中心校と称し、その小学
校長と町村長の俸給は同額とい
うのが多かった。ちなみに古平

かにわきあがつてくる感興を大
切にした洋画家と言われ、小樽
初の洋画展を開いた先駆者と称
されている」とある)

◇各町村教育費負担

大正六年、全道の一級町村(※
1)について一戸当たりの教育費
の負担額平均は約一三円一五銭
で、これを後志管内の一級町村
でみると次のようである。

順位 町村名 負担額

一	岩内町	一五円〇八銭
二	俱知安町	一四円九四銭
三	美國町	一四円七四銭
四	磯谷村	一四円二五銭
五	寿都町	一三円五三銭
六	余市町	一三円四二銭
七	大江町	一三円一一銭
八	古平町	一二円六一銭

古平町についてみると、全道
平均より六四銭低くなっている。

◇義務教育費国庫負担

大正七年、市町村義務教育費
国庫負担法が制定、公布された。
この法律によつて、市町村立尋

各校の就学状況	
学 校 名	学級数
古平尋常高等小学校	一三
同鶴居木特別教授所	一二
沖尋常小学校	一〇六
群衆尋常小学校	一〇六
合 計	八二
同 新地分校	一五九
同鶴居木特別教授所	一六三
沖尋常小学校	一六六
群衆尋常小学校	一五五
合 計	六九
増 増 増 增 減 増 七二	前年と比較
八 二 七 六 〇 六 九	

常小学校教員の俸給の一部は、国庫が負担することになった。この国庫金の配分は、小学校の教員数と就学児童数によつて交付されるものであつた。

この年の義務教育費国庫負担の総額は一千万円であつたが、大正二年には五千円、さらに大正一五年には七千万円に増額された。

この法律によつて、大正七年度の古平町義務教育費下渡金は一・三七五円六三銭であつたが、教員俸給の支給総額は約八千円であり、国の負担額は約一七%に過ぎなかつた。

大正二年になり、国の負担額が五千五百円余りと増額され、教員俸給の支給額も一万九千円余りとなつたが、国庫負担額は二九%と高くなつた。

◇第一次世界大戦と物価

大正三年七月、第一次世界大戦が起き、八月には日本もこれに参戦した。そのため諸物価は高騰し、特に俸給生活者は生活にも困難をきたすようになった。古平町では大正七年、小学校教員の住宅補助料を道厅に申請し、金三円の交付の指令があつた。

員の住宅補助料を道厅に申請してい

村財政にとつて大きな負担となつていた。

学校自体の歳入としては、裁縫補修学校の授業料七五〇円余り、住宅料補助金三円、義務教育国庫負担法による下渡金一五〇円以上

俸給月額に対する支給額

二五円以上

二五円未満

一割二分

また古平町は、後志支庁の再三の通牒により、戦時手当を役場吏員と同様に、教員も七割増額する処置をとつたが、大正九年度の政府予算は不成立のまま帝国議会が解散となつた。

しかし町では三月、町会議員の協議会に図り、臨時手当は現行の規定通り支給することに決定した。

◇大戦下の教育費

大正八年度の古平町の教育費の負担状況は、一般の部の歳出四一、二九二円二二銭に対し、小学校費は四、〇八九円八〇銭で、一般の部の五八・三%を占めていた。当時、教育費は町

五二二円余りのみで、ほかは町費により、一戸平均して一七円六四銭の負担であつた。

児童数の増加による校舎の増築設計や、校地の造成などの予算に金二千八百円、御真影奉置所の移転改築費金八百円、古平小学校修築積立金に二万円を計上したが、同年五月、浜町の大火のためこれらの計画は見送られ、運動会も中止となり、校舎増築工事は無期延期となつた。

また、同年の記述の中に、「児童用教科書の配給円滑ならず、学期初めに当り教授に差し支えること屢々（しばしば）あるは甚だ遺憾とする」とある。

（大正五年設立の「古平町立裁縫補修学校」については別項）※「一級町村」＝北海道に住んでいる人の中には、以前は本州のことを「内地」と言う人がいた。内地の反対は「外地」と言うこと

で、北海道はもともと日本の領地ではない、外地だと思つてい

る人たちが多かつた。明治六年、政府はこのような呼び方を公文書では禁止したが、習慣として昭和になつても続いていた。

明治政府も北海道は生活程度や文化の面で本州よりも遅れていたという見方から、本州では町村制が敷かれているのに、北海道では函館・札幌・小樽などのほかは制度として町や村は無く、役場は制度として町や村は無かった。

ようやく明治三十一年、「一二級町村制」が公布されたが施行されたのは同三年で、一六町村となつた。

そして明治三五年、二級町村制が施行されると古平町も二級町村となり、同四十一年、一級町村となつた。一・二級町村は町村の規模や市街地の状況などによるものであつたが、それ以外の町村には戸長役場が置かれ、町村議会もなく、昭和一八年、一・二級町村制が廃止されるまで続いていた。

秋の足音

大澤文子

お盆の精靈祭りもすみホツとひと息つく頃、垣沿いの芒のあか穂がありなしの風にそよぎ、初秋の気配を感じさせる。

日めくりを換るのも早い。常に猛暑に弱い私はやつと夏バテ状態から立ち上がる」とも出来「俳人一茶」ではないが、「われと来て遊べや親のない雀」と、朝々飛び来る小雀たちに声をかける。

ひとつかみの餌を餌箱に入れるのが用心深い習性なのか、やや過ぎたから一齊に小枝から降りついばむのだった。

私は窓からそつとのぞき、ホツとする朝々である。

今年は例年より特に猛暑が続いたため、常に体温の低い私は耐えることなく幾日か床に伏した。が秋めいた気候にホツと安らぎを覚え、ソをもつた。

ふと初秋の青空をかろやかに飛びゆく機の音に、いつの日か姉から聞いたことのある作家「野上彌生子」氏の歩かれた道を思い出したのである。氏の歩かれた道はながく広く、そして一步一歩努力しながら歩き続けられたすばらしい道であった。

「人は生きている間は何か仕事をしなければなりません。私は他の道を知らないのでネエ、こうしてペンをもつていてますよ」…九十七歳の彼女の筆である。九十七歳の時に家族の反対を押し切って眼の手術にも挑戦したと言う。

「詠み書きもせず何のために生きているの」と言うのが彼女の身上である。

一日に原稿用紙二枚を必ず書き続けたという。白寿の祝う会にでも「とぼとぼ歩いているうちにこん

百歳まであと一ヶ月余のところであれられたという。「知的な作家」として際立っていた。

いつの日か「お会いしてみたかった」なア…なんて夢のよくな」とを思ひ悲しかった。庭隅に咲き盛る白百合を一輪・ソット原稿の上に置いた。

その時、ふと退屈そうな音をたてて電話のベルが…あわてて受話器をとる。

「あのねエ、盆休みにねえ、四晩も娘の家に泊まつて来たの。海にも行つてネエ、観貝をとつてきたのよ、楽しかったア」

うれしそうな親友の声、いつも静かなおひなのに今日は別。「よかつた、よかつたよねえ」と幾度も返事をかえす。お盆の半分は氷のかけらをくちにふくみ、ガツチリ・パンを離す」ともなかつた、わ、た、し、

なおばあさんになつてねえ、途方にくれていますよ、ウフハ」と語られたという。

白寿になつてもなお、途方にくれる。「そのみずみずしさ」…そ、現役作家としての秘法であろう。

百歳まであと一ヶ月余のところであれられたという。「知的な作家」として際立っていた。

いつの日か「お会いしてみたかった

なア…」なんて夢のよくな」とを思ひ悲しかった。庭隅に咲き盛る白百合を一輪・ソット原稿の上に置いた。

その時、ふと退屈そうな音をたてて電話のベルが…あわてて受話器をとる。

○適度の運動をして汗をかく

○文字を書き続け脳細胞に刺激をあたえよう

○「いい年をして…」引っ越し思案にならぬ」と、等々。

○「いい年をして…」引っ越し思案にならぬ」と、等々。

○積極的な意欲が生き生きとした人生に通じようというものの。

朝々わが小庭に来て愛らしく鳴く小雀たちの止まり木は梅花(ばい)かうつぎと言い、桃色の蕾を多くつけてるので、まもなく花盛りとなつう。

朝々わが小庭に来て愛らしく鳴く小雀たちの止まり木は梅花(ばい)かうつぎと言い、桃色の蕾を多くつけてるので、まもなく花盛りとなつう。

私は秋づいて來た夕空を見上げながら、数々の書類を抱え、急ぎ庭の石段を駆けおりた。

近くのポストへ…と。

祭りと父の愛

葛西庸三

過日、村井芳男先生より「広報・ふるびら」の八月号を送つていた。表紙を見た途端、思わず「わあ」と大きな声が出た。

琴平神社御例祭の「華麗で勇ましく宙を舞う猿田彦」の写真が大写しに出ていたからだ。

一見て、見て、出てるよ。と妻を呼んだ。

—あら、懐かしいね。思い出すわ。

妻は上ずつた声を出し、両手を高々と揚げて、猿田彦をしげしげと見た。

私の家族にとって、琴平神社御例祭は、思い出の大切な宝物なのである。

さて、私の父は、私が九歳の春、五十二歳で病死した。だから父に関する思い出は少ないのだが、頭のずっと奥に微かに残っているのは「祭」にまつわることなのである。

秋祭りはその広場で行われ、何軒かの出店と、夜になると田舎居か弁士つきの無声映画会が実施された。

藁葺きの馬と同居している狭い家に住んでいた私には、映画に出てくる街並みや住宅や家具、着飾った男女は、この世のものとは思えなかつた。不思議な思いをしたこと、遠い想像となつて蘇つてくる。

父のことでは、岩内神社の御例祭である。岩内の街から四キロほどしか離れていないかつたので、岩内神社の本祭りには田畠の仕事を休み、家族それぞれが、思い思いに岩内の街へ行つた。

少し行くと女相撲の小屋がある。父と私は大勢の人混じつて幕の前に佇む。しばらくすると幕が開き、樺を締めて取り組んでいる女力士の真剣そうな姿が目にに入る。ある時は勝負のことでのんびり剥き出して激しく口論する場面もある。その形相に驚いてみると、スルスルっと幕が降りる。

すると父が歩き出す。私も歩く。太陽はまだ西の中空にあるのだ。いつも一人の妹は母と一緒に行き、なぜか私一人が父と一緒に歩いた。先ず、御輿が前を時々声を掛けながらゆづくり練り歩く。槍や長板・扶箱をかつて長く続く奴さんの行列を見る。

道の両側には出店が並び、物珍しく欲しいものが一杯あるのだが、買つて欲しいと言えず、黙つて父の後について歩く。

サーカス小屋の前に来る。じつと立ちどまる。入口で客を呼び込む笛や太鼓が賑々しくなつて、時々サーカス小屋の幕が開く。空中ブランコの最中だ。やあ凄いなあ、と思つてみると、幕が降りる。

少し行くと女相撲の小屋がある。父と私は大勢の人混じつて幕の前に佇む。しばらくすると幕が開き、樺を締めて取り組んでいる女力士の真剣そうな姿が目にに入る。ある時は勝負のことでのんびり剥き出して激しく口論する場面もある。その形相に驚いてみると、スルスルっと幕が降りる。

すると父が歩き出す。私も歩く。太陽はまだ西の中空にあるのだ。

さて私は、若い時に「私は父親の愛を知らない」という文章を書いたことがある。

今にして思えば、貧乏暇なしだとでもサーカスや女相撲を見せ、社の祭に私を連れて行き、ちらつた父が、農作業を休んで岩内神の遠い記憶の中に、懐かしい風景として残してくれたことが、父の愛ではなかつたのか、と思うのである。

が、さあ、帰るぞ、という父のひと言で、まだ居たい気持ちを押さえて、とことこ帰路につく。

家に着くと、父はすぐ作業衣に取りかえ、鎌を持って馬の草刈りに行く。

短歌

古平町岬短歌会

三キロの遊歩道来て神仙沼のむらさきトンボに心奪はる

寺田カツ子

大湯沼硫黄の匂ふ源泉に湯けむり揺らめき旅人誘ふ

仲谷喜美能

虫時雨波うつ音と聞こえ来る海辺に近き庭着き抜けて

堀典子

虫の声夜つゆにたへて秋告ぐる自分はことと命もやして
秋晴れに丘までの道を歩み来て見上ぐる空に広ぐる白雲
静か夜の窓辺に孫は虫の音を鈴のころがるやうと喜こぶ

金子寿子

坂本信子

鈴木時子

小庭の木縁の中に少しづつ黄葉目に立つ秋のおとずれ

田中香苗

遠く近く海の面にうく灯籠に父母語りゐし潮騒を思う

玉谷美都子

屋根近くのびゆく朝顔藍色の朝々咲くを楽しみかぞふ

丹後初江

私の一首

池田テル

祭り山車の笛疲れし代らむとわが家のひとり笑み出でてゆく

いつの間に笛吹き上手になつたかと、母の私が驚いた日です。
小樽の高校にても勉学のほかにいろいろの事が身についてて、
子らの進歩が目について楽しい自分になつてきました。

水の辺の闇に尾を引き螢飛ぶ 山口悦子

看護師の優しき声や髪の蝶 越野敏雄

裏山に張り付く団地蟬時雨 斎藤波留 夏霧や古刹すっぽり包みけり 大和田絵伊

俳句 古平俳句会



雜詠〔九月号〕

主宰 水見壽男

古平俳句会

山鳴りの止み岬鼻に卯浪立つ

鎮もれる五月の山や海は風ぎ

燈台の輝き戻る岬五月

波高し卯月曇の日本海

青空の透けて明るき若楓

山口悦子

越野清治

青空に色を尽して葉桜に
秉して葉桜色の透きとほる
葉桜にささやく風のあるところ
夏の雲湧き追憶のわく磯路
梅さくら同時に咲きし花見かな
桜散り最北の町雪が舞ふ
雀どち巣立の準備羽繕ひ

高橋重子

コンバイン軽やかな音麦の秋
若葉風声いきいきと澄みにけり
若葉風秉の色の青かりし

外山俊久

しゆんしゆんと音立て伸びる若葉なり
麦秋の海鳴り遠く丘暮るる
木洩れ日の青き秉の風若葉

堀典子

渡辺嘉之

波よりも白き五月の鷗かな
船音の近し遠くの夏霞

室谷弘子

新緑の真只中風軽し

新緑や浪の高ぶり止まぬ岬
新緑や朝日捉えて波の綺羅

河口の海猫を圧して鯉のぼり
吾が街の川を制する鯉のぼり
川走る風の息吹や鯉のぼり

吾が街の川を制する鯉のぼり



奴心
詩

〔三八〕
—九月号—

古平俳句会

浜風に身を寄せ合へる月見草 高橋重子
そこはかと香る黄昏月見草

雪渓を遙か遙かに大地踏む 越野清治

渓蓀ゆれ水面の揺れて風の音

日暮るゝを待ちし軒端の螢籠 山口悦子

象潟の母の芭蕉も玉解きし

雲の峰浮ぶ巨船や北航路 越野敏雄

入道雲重ね着したる茜彩

万縁の湯面に浮びて湯に浸る 大和田絵伊

アイリスの一番咲は供花として

天然のうなぎ見事に捌かれる
炎帝や夜に入り雨となりにけり 堀典子

つぎつぎと湧きて輝く雲の峰

沖雲の夕立雲に追はれけり 渡辺嘉之
夕立に追はれるやうに波返る

波飛沫迫り来たりし避暑の夏

室谷弘子

刻々と変はる雲脚昼寝どき

夏霧の眼下に湧きて日の眩し

仲谷比呂古

沖合ひに白き巨船や夏館

雲の峰 一筋の道灯台へ 高橋重子

日の盛り夜の帳に消されけり
渡辺嘉之

風鈴が風のありかを教へ呉れ 外山俊久

潮の音にまぎれ夜更けの涼みかな
室谷弘子

草いきり撫づる児の髪野に立ちぬ
堀典子

馬鉢薯は田にも山にも鮒きにけり
仲谷比呂古

編集雜記

△昔から『暑さ寒さも彼岸まで』といふことわざがありますが、秋分の日は、一週間ある秋の彼岸の真ん中で「彼岸の中日」、このあたりから残暑も過ぎて、そろそろ朝晩は寒さを感じる頃。春分の日も同じで、春の「彼岸の中日」、冬の寒さもそろそろ和らいでくる頃。しかし近頃の暖冬異変ではどうでしよう。体育の日に東京からの電話では、「東京では冷房を入れてる」とのこと。こうなると日本も広いということか、いや、長いからでしよう。もつとも古平と東京では、南北に九百キロ余りの差がありますから……。

▽今年もまた古平の町を訪ねて—多くは古平の歴史を知りたい、古い道を歩いてみたい、若い夫婦連れでした。卒業論文に取り上げてみたいく札大の女子学生、昔古平に住ん

院を経営していた劉さんの子孫、などなど……。その中で、江戸時代の初めから古平と関係の深い近江商人の出身地である近江八幡市からは、一〇数人のコーラスグループの訪問などもありましたが（このことについては先号でも紹介）、今回、長年にわたり、古平町で積極的に山林造成を進めてきた札幌コーポの会員の方々が、古平の歴史について参考にしたいとお出でになります。古平町への理解を深められ、また古平町をよく知つてもらうよい機会になれば幸いです。

▽秋の深まりと共に、古平町文化祭の時季になりました。去る二一日から恒例の作品展示会も開かれておりますが、今年もまたロビーで『古平町の昔を知る写真展』を行つております。今回は、展示した写真二七点について別に冊子を作成し、家庭

いと思つております。役場保健福祉課の希望もあり、掲示した写真は数点ずつある期間、元気プラザのロビーにもこののち展示する予定です。

▽紅葉の秋を迎えて各地で自然を散策したり、季節の味覚キノコ採りが盛んですが、町内の道路の外れには至る所に「クマに注意」「ゴミ捨て禁止・通行禁止」の看板がやたら目につきます。クマはいたし方ないとしても、社会問題にもなつてているゴミ捨てには注意したいものです。

▽『ご覧になつた方もおられると思いますが、道新夕刊に『北海道方言のいま』という表題で、見野久幸さんの方言研究の一部が紹介されています。見野さんは元小樽潮陵高校の先生で、退職後も続けて研究をされています。奥さんは古平出身（古中第16期・富本敦子さん）で、数年前になりますか、敬老会で配付し

た『古平の方言』をお送りしたところ、方言についての資料を送つていただきたことがあります。町内の方からも「こんな言葉もあるヨ」と、その後、三〇数語も集まりました。せつかく皆さん方から協力していただいたこともあり、前に印刷した『古平の方言』に加えて、改訂したものをお出したいと思つております。消えて行く方言を何とかして残したいのです。「なまら」と言う方言を若者が新しい感覚で使うのを、この間テレビで見て驚きました。

▽『せたかむい』ですが、以前は月末の最終日には発行してしまったが、主に自宅で仕事をするようになつてからは資料などの準備に手間どり、不定期の月遅れになつてしましました。愛読されている方からは『せたかむい』の発行日を決めてほしい・・・との要望が強いのですが、何とかしようとしたがんばつてゐるところです。

▽昔から「暑さ寒さも彼岸まで」ということわざがありますが、秋分の日は、一週間ある秋の彼岸の真ん中で「彼岸の中日」、このあたりから残暑も過ぎて、そろそろ朝晩は寒さを感じる頃。春分の日も同じで、春の「彼岸の中日」、冬の寒さもそろそろ和らいでくる頃。しかし近頃の暖冬異変ではどうでしょう。体育の日に東京からの電話では、「東京では冷房を入れてる」とのこと。こうなると日本も広いということか、いや、長いからでしょう。もつとも古平と東京では、南北に九百キロ余りの差がありますから……。

▽今年もまた古平の町を訪ねて一多くは古平の歴史を知りたい、古い道を歩いてみたい、若い夫婦連れでした、卒業論文に取り上げてみたいく札大の女子学生、昔古平に住ん

院を経営していた鑑さんの子孫などなど……。その中で、江戸時代の初めから古平と関係の深い近江商人の出身地である近江八幡市からは、一〇数人のコーラスグループの訪問などもありました(このことについては先号でも紹介)、今回、長年にわたり、古平町で積極的に山林造成を進めてきた札幌コーポの会員の方々が、古平の歴史について参考にしたいとお出でになります。古平町への理解を深められ、また古平町をよく知つてもらうよい機会になれば幸いです。

▽秋の深まりと共に、古平町文化祭の時季になりました。去る二一日から恒例の作品展示会も開かれておりますが、今年もまたロビーで『古平町の昔を知る写真展』を行つております。今回は、展示した写真(一七点について別に冊子を作成し、家庭

いと、思つております。役場保健福祉課の希望もあり、掲示した写真は数点ずつある期間、元気プラザのロビーにもこののち展示する予定です。

▽紅葉の秋を迎えて各地で自然を散策したり、季節の味覚キノコ採りが盛んですが、町内の道路の外れには至る所に「クマに注意」「ゴミ捨て禁止・通行禁止」の看板がやたら目につきます。クマはいたし方ないとしても、社会問題にもなつてているゴミ捨てには注意したいものです。

▽「ご覧になつた方もおられると思ひますが、道新夕刊に『北海道方言のいま』という表題で、見野久幸さんの方言研究の一部が紹介されております。見野さんは元小樽潮陵高校の先生で、退職後も続けて研究をされています。奥さんは古平出身（古第16期・富本敦子さん）で、数年前になりますか、敬老会で配付し

た『古平の方言』をお送りしたところ、方言についての資料を送つていただきことがあります。町内の方からも「こんな言葉もあるよ」と、その後、三〇数語も集まりました。せつかく皆さん方から協力していただいたこともあり、前に印刷した『古平の方言』に加えて、改訂したものを出したいと思つております。消えて行く方言を何とかして残したいのです。「なまら」と言う方言を若者が新しい感覚で使うのを、この間テレビで見て驚きました。

▽『せたかむい』ですが、以前は月末の最終日には発行していましたが、主に自宅で仕事をするようになつてからは資料などの準備に手間どり、不定期の月遅れになつてしましました。要望が強いのですが、何とかしようとがんばつてゐるところです。

古平町史年表

昭和38年 (1963)

- 10/27: 井川北海道開発政務次官、小樽開発建設部長一行が古平漁港ほかの視察に来町する
- 10/30: 泥の木種田橋が竣工し渡橋式が行われる
- 10/-: 家畜センターのモデル地区でもある六志内農場に、寿都町から肉牛20頭が入る
- 11/21: 古平川護岸災害復旧工事が完成する
- 11/26: 古平町全地域に納稅貯蓄組合(58組合)が結成され記念式が行われる
- 11/27: 函館行政監察局による行政民主化懇談会が町役場で開かれる
- 12/1: 古平町全地域で(58組合)が設立される
- 12/16: 沿岸構造改良事業として製氷工場建設が認定される
- 同: 北海道中央バス(株)古平出張所が美國町に移転し、同43年から美國営業所となる
- 同: 古平漁港第3期工事が着工される
- 同: 古平町特殊学級振興会が結成され、会長に松座好雄が選任される
- 同: 稲倉石鉱山で有望な新しい鉱脈(富鉱体)が発見され、全山挙げて祝賀会が開かれる

昭和39年 (1964)

- 1/27: ライフ誌のカメラマンが古平漁港でスケソウ漁の状況を撮影し、その写真がライフ誌に掲載される
- 2/16: NHKが「たら場で働く人々」を古平漁港で撮影し、2月4日テレビで放映
- 4/1: 稲倉石川左岸の北側斜面で融雪による大雪崩が発生し、鉱業所の建物が6棟倒壊したが、幸い人身事故は無かった



↑ 六志内農場で放牧された乳牛



↑ 古平中学校裏手の堤防が崩壊し応急工事中の現場



↑ 古平漁港でスケソウの陸揚げ



↓ 雪崩による倒壊の復旧作業